

蝦蟇異聞

三又

十四



k 44

富士山文庫



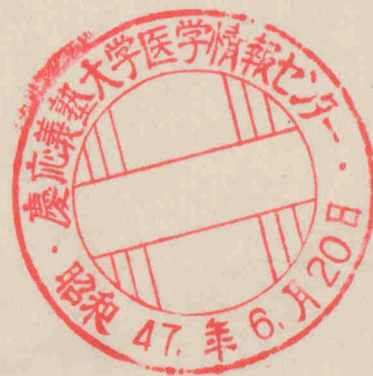
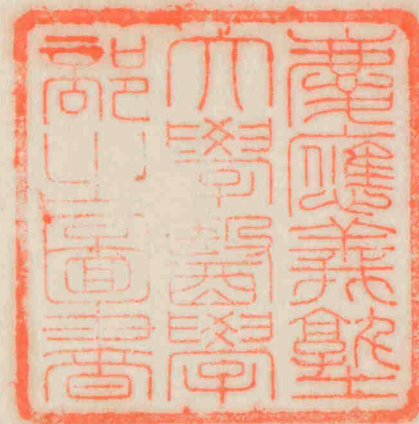
290.9

Ka

10

290.9
K

No. 2524
12 K 24



瀬川文庫

173

三又



環海異聞卷之十四

長崎若岸より上陸以來追記

九月六日

五九時

長崎伊王崎へ船行

船中

長崎の勝つておちうといふ事船中の役人
知つた子すれとも始つてのる長崎の海軍の
程を考へ船中へ船を止めて居る内脱した

船の入りしるも海をてえす——とそは彼人
友人中島の小舟を建——毒船はありえ面り
出されり船中よりハセ海致ふより見え乃
船をわたりあく船をく漂流人をちり細を
中させし使節命せり我くた是と乃渡海
其目も地といひま——こは去海なりといふも
何とあるとちるをそけり思ひさせ——と向ふ
より波船あるといふは——我邦の船やを

えれ——え結わたり——内政事とを甘ええれ
船の造り並に内は所々——日本へ入り
婦——き眼りれ——安ま——漕ぎ舟なる使節の
命の如くす——とね——を——て結更たる所
程——と船の際より来りたり松子るれゆ
越の如く悲しい且悲——と狗——といふさうり——云
もやあす——をねるうりそかくある門もや
子細やせと——いひたるゆ——必要あり——

居あしと指あふを是と云ふ——居あしと
居あしとの次手法役人より委細——法乳回有り
い節使節レサノツトハ椅子より椅子と動けり
阿茶院のかは丹を同室へ入る——居あし何の間
そ何る居るすくぬかは丹使節の被褥をきて
をさねるうけ——きなり大通調石橋助右衛門と
いふ人彼役人ランゾフといふ者へ對話此事
ふれくる——之使節阿茶院かは丹をえうれふ

位階もあし——早きものなり我と同座をきき
る——用より疎——ふれ退くせ櫓へとも動く被褥
の役人へ指あし——椅子より——かは丹を退き
櫓へより居り我——共法尋一通り渡りて
その所を退かせ——友其後の事——えりせは
い節松前より——先年より——おうれ——出院
文阿る居——と法尋何り——是を指あしとて去
り——第法より——錦様の被褥をを恭——

指あはる顔きなりは川合も有て國王の
書簡字も指あせし申越と物の内何れ一果
おせしとすなり

玉王の書管結接れると云後のをれをけ
案入しし舟中よりとえしと何れ
とも内之文と書等の事ハ夢及ふはけき
と書等しし猶猶等書しはれとくと
夢あり是はけきしとて定法なり

いふは書しし夢及書しおしとあるとと
えん書ししとえ書しと指あせしと
右法記ししと書ししとて人元如法丹もたは
形せしなり

附記

長勝へ魯西亜船名の
室初出後使はるしとす

九月六日

一天第兄張出書新しうり船名年とあり。お
あり白帆おえしと出書と有しと無程野母

一 何處に渡りし事

ヲロシヤ王王に江戸へ三通り書留并

就貴お礼お礼度及使事したる渡り仕

一 先年振事地にお渡り砌伝脚に渡りぬ右の

付席持渡りし

右持渡り別伝脚部は控使に合渡り

一 才ロシヤ國に何に於て致しや且何處へ迄寄

り申委細やとの様系部未承り

付年先は書留有る事

一 江戸表並に申す所へより書留控使に

のお渡り事

付年江戸表に據り書留同所へ事と申す中書留
不に控お書留に申す持系は度何に地は方難指し

一 伝脚控使にお渡り

是より又此役へ申すは持系仕度り

一 江戸法のもて武部玉葉と申す部り

付年異りしは終束中玉葉部は年何に難致
明部に及り付年此部より

右ノ諸舟中如シ人乗船既分者互ニ礼を以て
お對ニ應對ニお見ゆ

お路ニや人お中ニ

一拾一ヶ年已来同所へ日本船漂流仕度乗組者
共ニ口口人計席連渡九人ノ者同所へお殘
居ル於合拾六人漂流仕度

此等

此九人ノ者互ニ何處所ニ

此等ありや互ニ此ノ在席仕度仕度お好仕度

此等事

一此今ノ勢より場所多お是れ第一風波

ノ勢より無心えゆる事ノ凄門止出挽入

此等事

ノ事容易ノ難減減ノ勢より此等事

新正可ヤ上

一此等事ノ勢より此等事

子後進多由沙汰より可なり

右記出所より漂流人曰人者大なり

く此よりたし記

一 子方其何國より者なり

仙居より者なり

一 仙居ハ何より者なり

此言九通

新江村

江太史 二十二年

家溪

候年 二十二年

同

九年 二十二年

家溪

太十席 二十二年

一 何年何月何日仙居より船渡り

寛政五世年十月七日出船仕

一 ありや玉ハ何より船渡り

世十一月廿七日難船より船渡り

十日よりありや玉ハ漂流仕

右七月廿七日附漂流船より来りて
船中ハ何人の死にたり

一 何れを獲て仙臺に船致し

仙臺に江戸表に船致し獲て仙臺に

一 其方よりある人、お船に船主組系中

あり、や王と名を、その方より目へ歸せ

度より、此等此處に歸せ仕度中

たより、此處に目へ歸せり、此等此處に

組系中

一 船に名石致し、此方より

名石致し、名石致し、名石致し、名石致し

一 船組何人より有る

船主拾六人、船組三人、お船に、お船に、お船に

仕残り九人、あり、あり、あり、あり、あり、あり

一 九人、何れに船中

あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり

人、者、居、合、り、る、九、人、目、人、極、老、り

手是も子計の有る其の病氣は此の由なる
至解等お残りや

右の漂流人とも何事もおろや人獲るは
彼ハ白木綿魚本綿の獲るおろや云禁能
是れ指し指しは此の由

一は獲るは此の由と彼は獲る人紐仕込の獲る
と持繰り一は合と持り前と後身と紐
持ち是人太き太鼓とさうけ何事も到

と云々一はお並居太鼓とおお一合と一と
援身一紐と持り者何れも配一紐と振と
け七人一人を人進お獲るおは紐仕込一紐
六人も同紐仕込をい一紐と取る者船
頭部を踏子に踏と足連ひとある同所へ
歩入は持繰りや

船頭部を踏り甘入り口なり紐凡そ入る
一紐一船と云復大本二紐子の紐切は

出授使し度也 但凡八九巻を収め

其向窓硝子障子窓其申は板有り大鏡を

懸け置り其は半室に方の版意に敷有し

上蓋の板其度紗をとりて三人に方し鏡を

有し其大鏡有し内は江戸の掛の書懸三巻

和文ヲロニア 満丹語一巻ありは其の所へ是と

出懸三巻江戸表へ掛し其書管し定し有し

江戸へ掛の書懸三巻といふを其系文傳其の張有

似る其語掛するは江戸も掛の玉王の書懸同との

三通り又徳持系の中を其和文は徳ノ一巻は本國オロニア群

の個へ一巻は満丹語を其ひし書し右同様の字も

持系すといふは其系が所上法目見は出入使席の趣を

以て其系を成したるは其ひしと其中文章三巻其

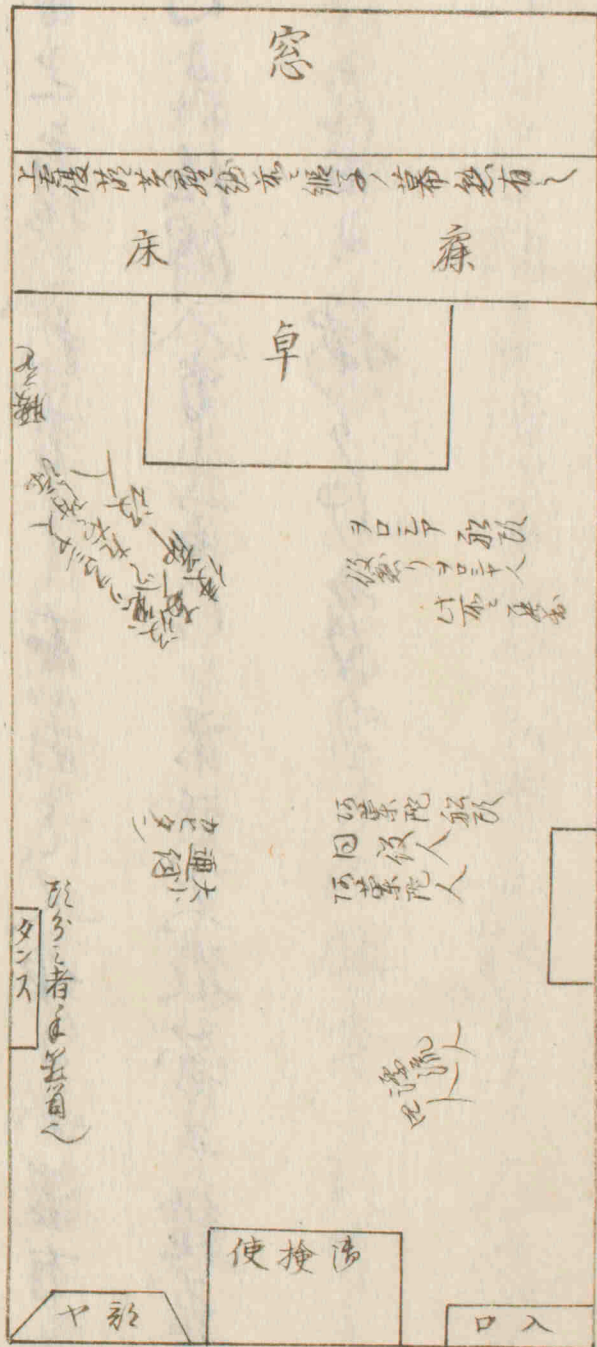
はせしは何れの文も其は其系を成したるは其

は合系を成したるは其ひしと其中文章三巻其

もと其系ひ其有し右系と又其は小系有し

内は其係入有し其門は其系大系其系其有

した右は其係しけ有し



是ハ長崎通商より流布せるその上面と
 元由本編と併せえ〜け時の様子を知るは
 与れる處より知るは存する

同七日

米中引船より本陣陣といふ名へ櫓に入る

長崎ハハ節に訪はれりて其後三日

斗の旨を語れ〜法事船中附〜述〜

けら後阪に渡りて山に入となり飯小を煮る事

たり 昂本陣浦へ飯を立ちて置く〜上陸致すこと
 あけけらにあり〜兼署する〜あり〜すこと

けさの夕〜是へ入中〜 長崎よりその記事
 あり〜記せ〜あり

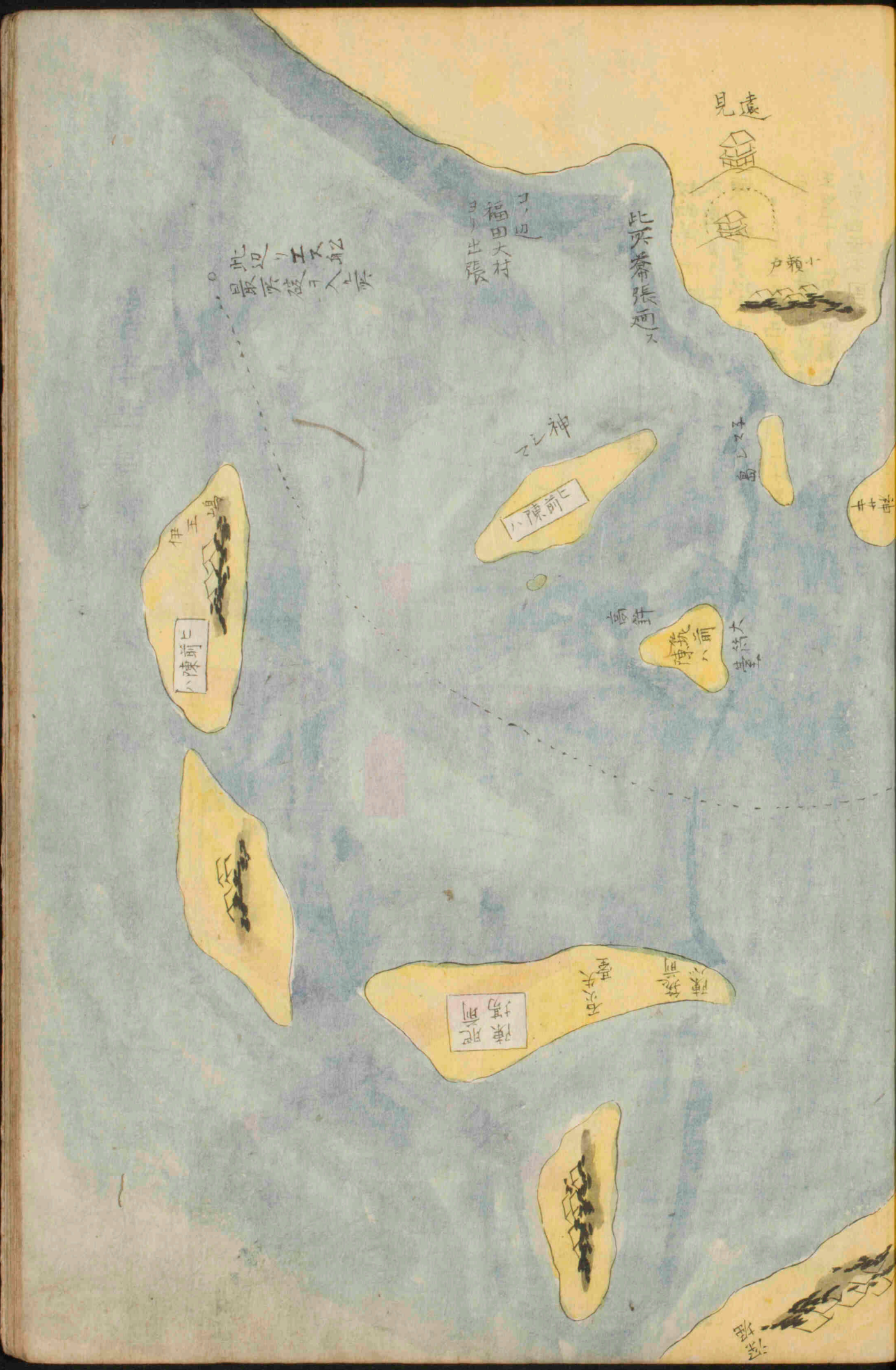
け節に賀福長りの法事あり

公義法取扱束の手前に記せるあり

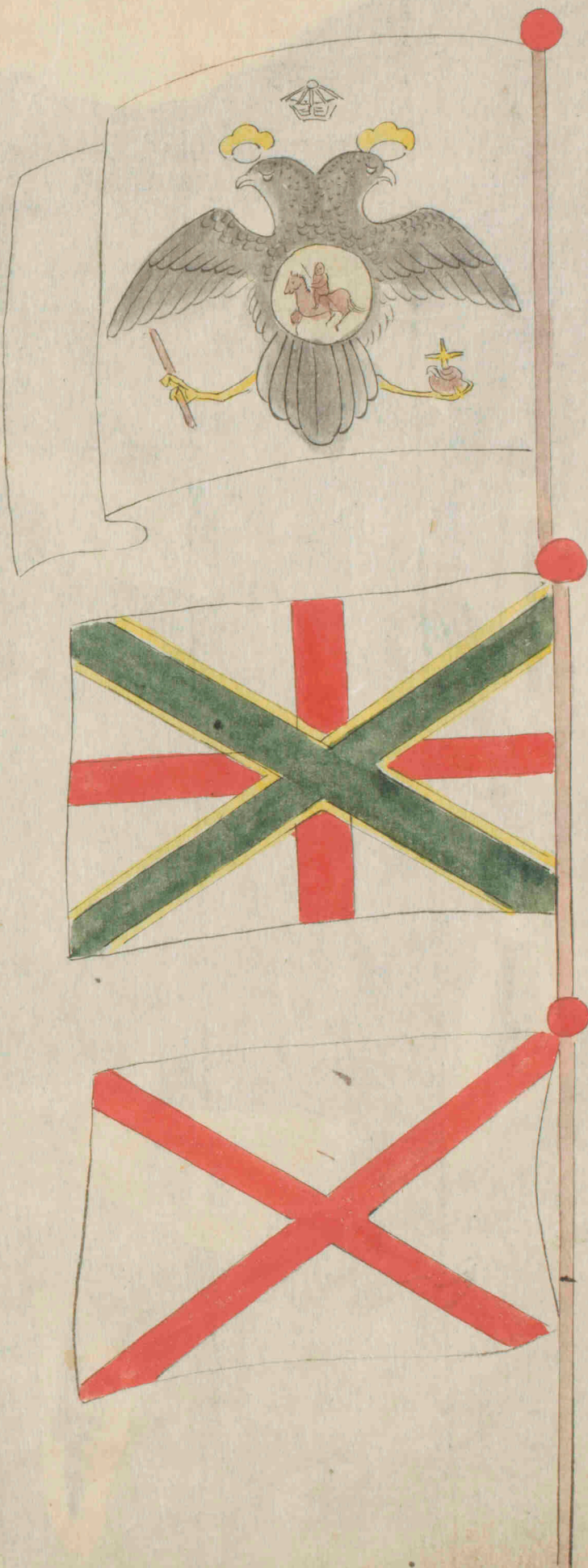
附せらる

長崎添口之圖

御番所
肥前藩邸
石火堂
肥前陳場
田中
三浦
西泊
内添
其後コロシヤ船
ハボカレ
御番所
肥前藩邸
石火堂
肥前陳場
田中
三浦
西泊
内添

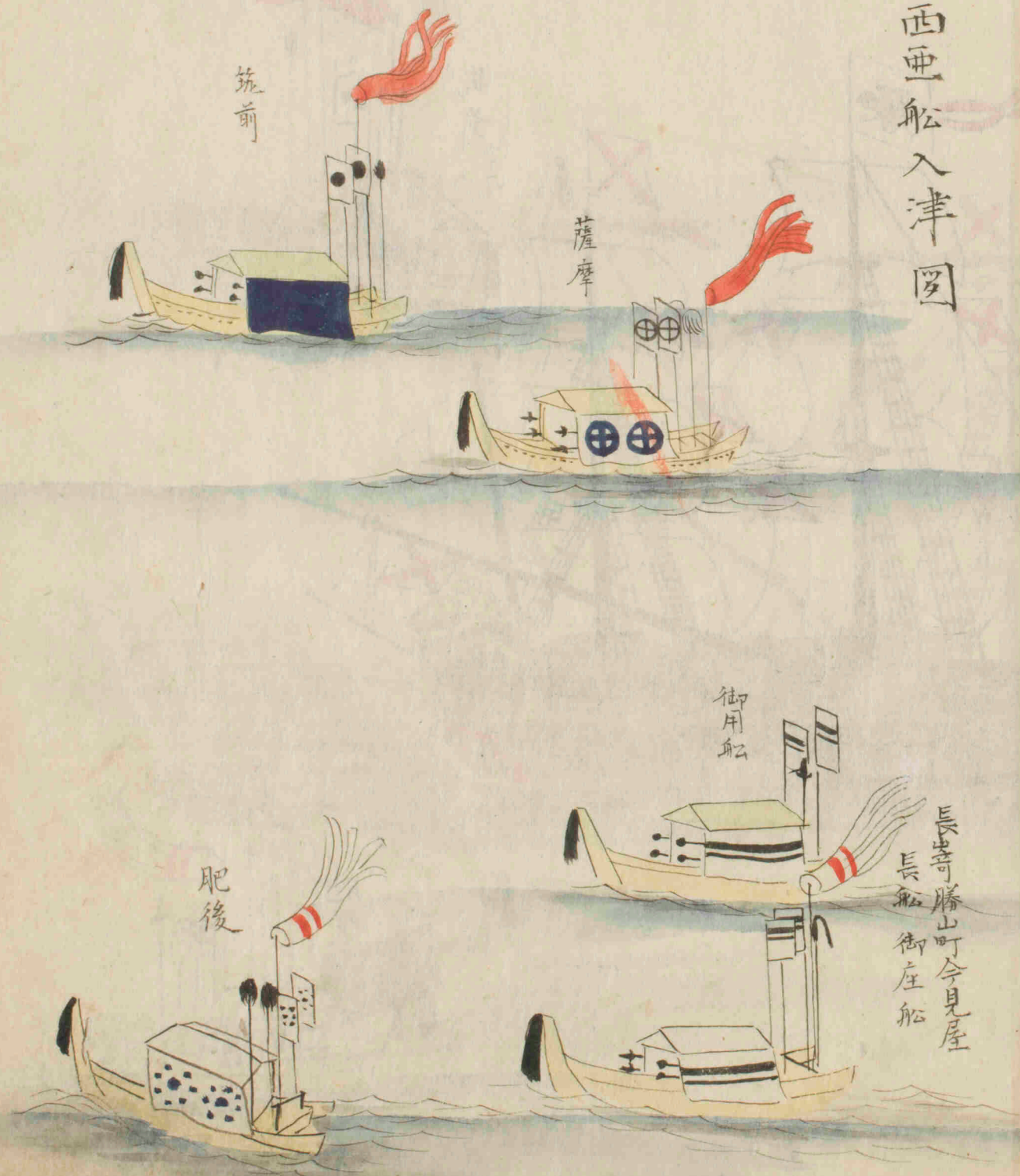


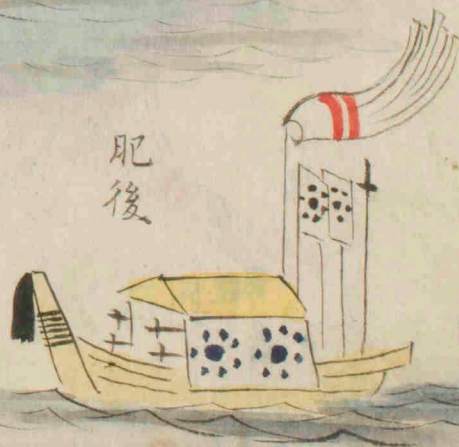
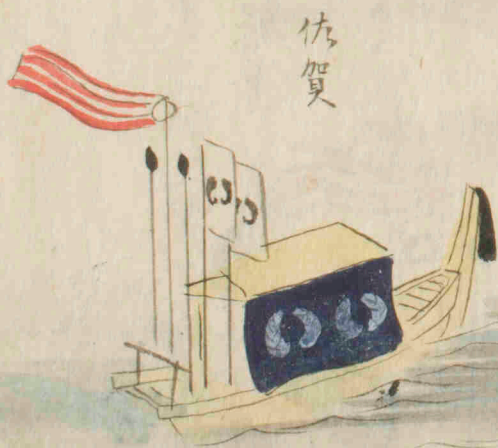
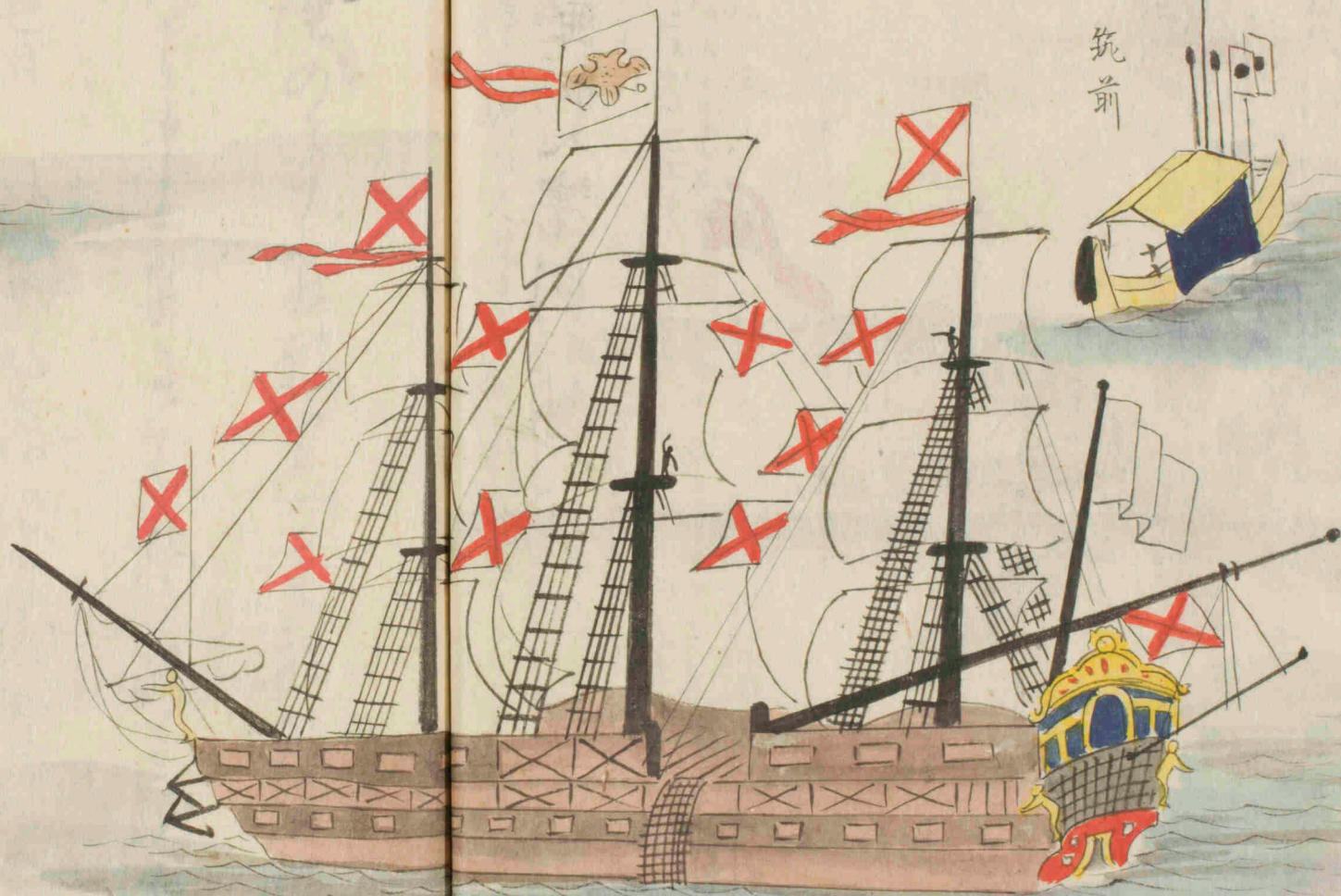
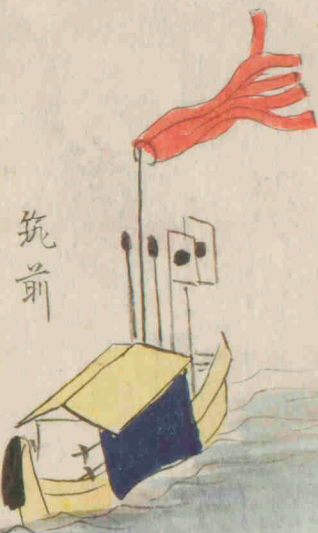
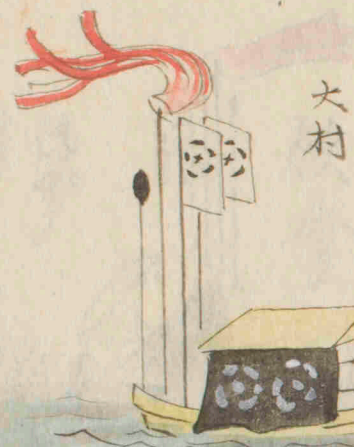
魯西亜国船印小旗圖



叔西洋ニテ 鷲ヲ以テ 徵号トナスモ 其来由ヲ 記スルニ 本朝 開天皇ノ 廿六年ニ アタリテ 羅馬ノ
 太 舊 カリ エス マウリ スナル者 其軍 旗ニ 鷲ヲ 画キシニ 始リテ 其後 羅馬ノ 尼 勒 帝ノ 帝王 皆
 頭ノ 鷲ヲ 以テ 其 徵号トス 蛇 及 頭ノ 鷲 右 球ヲ 抱リ 左ニ 笏ヲ 抱ルモノハ 其 原 尼 勒 帝ノ 帝國ノ 徵号
 ナリ シカニ 魯西亜ノ 王ヨシ子 スバシリテ スナル者 尼 勒 帝ノ 女リヒカヲ 娶テ 尼 勒 帝ノ 帝國ノ 徵号
 受シヨリ 其 徵号ヲ 傳ヘタルナリ 球ハ 和蘭語ニテ「イハス」ヲ フルト云 其 形 中ニ 帝者ノ 王ニ 抱ルモノ
 玉 器ナリ 笏ハ 和蘭語ニテ「レイヤス」ト云 其 カタチ「〇〇〇〇」ニ 似ナリ 鷲ノ 胸ニ 抱ルモノ
 ハ 魯西亜 本國ノ 徵号ニテ 騎馬ノ 人ヲ 以テ 龍ヲ 刺スノ 形ナリ コレヲ「セントジョージ」ニ 云フ 服章トイヘリ

魯西亜船入津圖





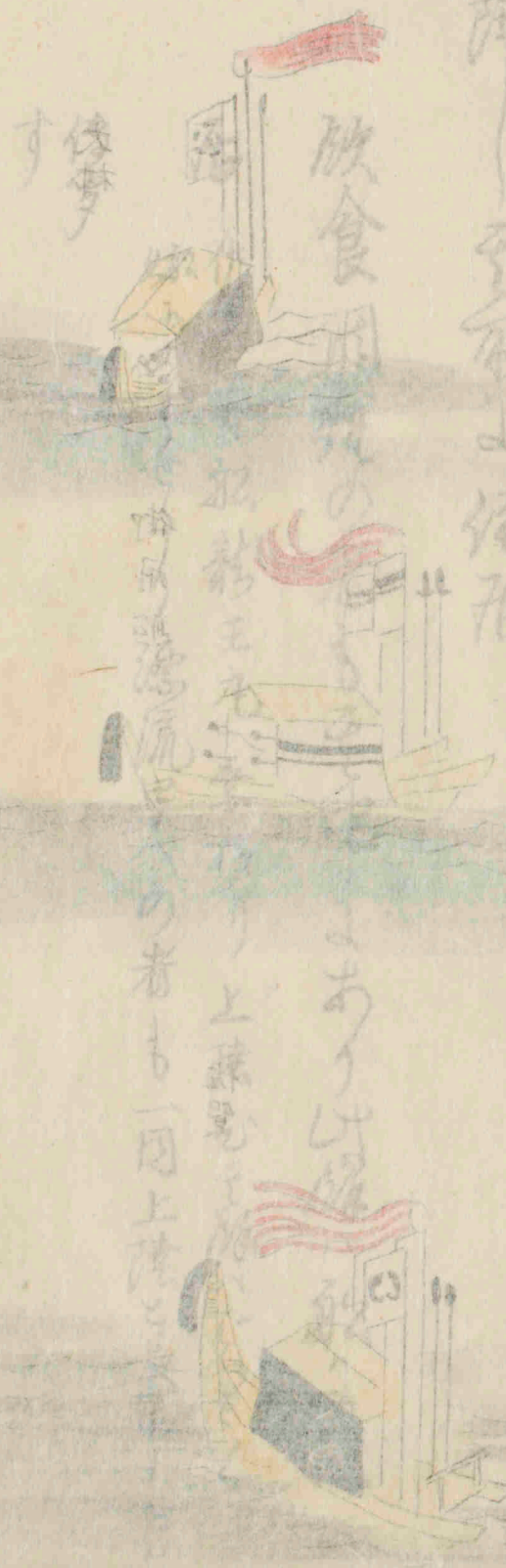


退り上陸のしるしを認め一たび船破壊し修理も仕度

超等船よりしるしを認め一たび船破壊し修理も仕度

十月十七日 使節と船役等の者が合衆人

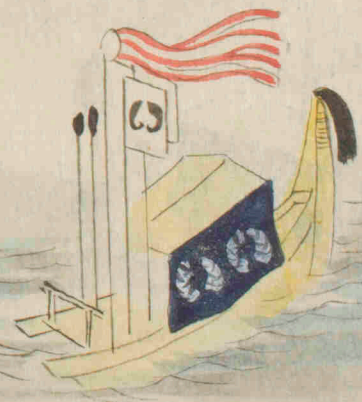
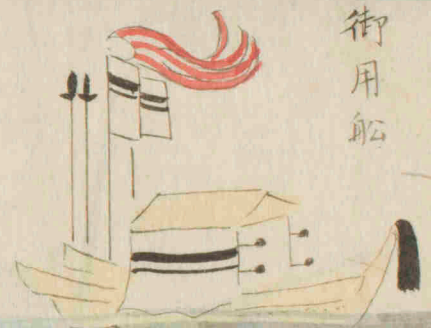
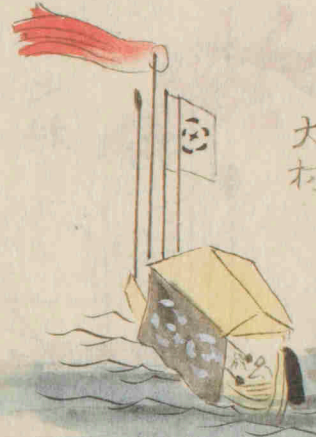
上陸しるしを認め一たび船破壊し修理も仕度



大村

御用船

佐賀



追々上陸の事お船中一本船破壊し修理も仕度

越等限々しゆ由りて林ヶ浜といふ所へ仮をあら

十月十七日 使節と船役等の者船中或拾人 一説

上陸 一説に仮居

飲食調理の者もその中よりあけ解ハ船に仮

居

佐賀は古船新王丸へ乗移り上陸を遂行ハたつて

船中の事より 渡流に人の者も一同上陸と長崎へ

傳す

魯西亜人客館圖



右ハ林ノ隣ニ建ル所ノヨロシヤ客館ノ略図ナ
 り右ノ旗ハ露國ノ國旗ナリ
 一ツ荒城ヲ示セリナリ右ノ船ハ洋館ノ裏
 船等モこれ大畧ナリトモナリ
 公堂ニハ一ツ一ツノ船ニ由被本船
 の船ヲ示ス一ツは畧ナリ右ノ船
 ノ船ヲ示ス

俵物船といふ有り来りの船の所へ板屋の補修
と此船と作りつけたり云云の船は建て使きの
居る有り来りの船をよりしきとて次の船も有り
と云ふ船と作り起るる旨は船屋と仕切り役所の
者共格違ひる使所より来りし人にて附居る時代と
えゆ船屋に入るのつぎを不ありつぎを附く船屋
と云ふ
船と云ふは右の船と云ふは

その中大鏡は横を父と云ふ人長に間厚に守り
縁は金と云ふ牡丹屋の船と云ふ船
表へは板と云ふ

その船のおもひに船の修復より船中積荷は網
と云ふは船は船に入るに運送するも船も云ふ
船屋より出船と大石と積荷よりこれ舟と云
くする為といふ船と云ふの船と云ふ

喰料未目々出弛をありむ重し果何より入
 喰のとれ入る極はなりたるを揺るさし
 らる

彼人爲何をもけりしやその果てなる所とて
 吾感たり醬油ハ列々貴味せり味増奈良漢と
 用ひ馴るるおとや格別貴美せたりと

渾身中土の氣を生かせるもの
 影をみれば
 せり物の影を鏡に移し
 取りて写す
 乃ち有り其

中日和婦人の要安を望せしに誠を容るゝ似せ
 うりこれ忘者の心解ほし隔るる^{タカニ}多知よりを
 えたりしものをいかに移しに写せりとすなり

按よそ書ハ私榮よひド
ンクルカーナルといふ
ものあるへ

莫多草木の乾乾のこ追へ館内へ入きて
 廿り或ハ草のこり或ハ草杯丸むをやへ
 列は物を納め眼を入けへふふ生物のこり

るせざるものありそ中世猶其の誠は不動の誓ひに
そへり

破門より——おは世來の教として言をとりて
の心を世自らこれと唱へていへる言の傳はる
言あり果ては世に盡くそ名を書ぬむ一不
種に漏するあり——そ中アゴウといふ医師も画
の事も細々と極めて巧みなりき云々其の証は
解はる——右の極まりてけ人の通ずる多く

事無き——趣あり

太十師ハ生りて臨終の性なり如斯く證する
そ後も何れの世にても言ふ我——は世にあり
もあつるものなり思ひ世に生れ一日も言ふ
我——其の言を傳へて又わが言を證し口の中
より突たりかき出たり血影をか脱ぎて早
不定より入たり破門破人にも大は證動して早
世に生れし證も言ふ世に生れし言はる

相違れども次事もお分り
本及友人御料人 吉雄 幸宗

お柳 口書 故より右の医師中目く元旦療治所

り舌も切れし飲食言語も出来ずその外悩ま

ふり残り三人の者を求む者病し来り本姓を

由 口書 中目も不寐の事とれし 口書 五叔大よ公常

たり追て口中も食へたれど飲食又も通ら

絶食二十日と云うく五叔もあし 口書 尚惑くし

幸成何う工夫の嗽薬をれし 口書 とうお意をてま

ふりハ自由な色するふと云れり 口書 彼等の医

師も我をおし 口書 花子く又その後食するも 口書 是等

を氣を甘し 口書 うと 口書 飲 口書 うり 口書 ぬ 口書 の 口書 事 口書 盛

く 口書 小 口書 被 口書 せ 口書 し 口書 ま 口書 は 口書 大 口書 の 口書 困 口書 り 口書 たり 口書 ま 口書 し 口書 後 口書 の 口書 向 口書 好 口書 し

や 口書 さん 口書 振 口書 り 口書 り 口書 あ 口書 て 口書 り 口書 此 口書 事 口書 免 口書 角 口書 の 口書 事 口書 云 口書 床 口書 の

物 口書 を 口書 居 口書 る 口書 と 口書 して 口書 今 口書 日 口書 の 口書 事 口書 云 口書 れ 口書 り

お 口書 け 口書 師 口書 毎 口書 日 口書 通 口書 師 口書 元 口書 旦 口書 被 口書 治 口書 せ 口書 加 口書 筋 口書 事 口書 云 口書 彼 口書 人

い 口書 つ 口書 の 口書 事 口書 云 口書 り 口書 是 口書 等 口書 の 口書 難 口書 事 口書 を 口書 治 口書 れ 口書 り 口書 是 口書 等 口書 被 口書 治 口書 せ

卯をのそきえく形を写せりとる西これとるよ
目本の如きわくも遠くす皆あきれうき
長湊湊湖の子満ち氣をなてえく松子也
船中よりと陸後いづくも誰一人く見せ
者れく或ハ測量算用或ハ書記或ハ画景或ハ細工
を務めよ月を要く暫時も果たせん

子の年 文化元年 甲子 二月廿日と 江戸表ハ正月廿九

を山金田所及 長崎へ出さる 程ききく 同二月初 七日
使節を立山湯殿所へ出候也

けり本のも別と借抄の記ききくは只漂
ちやせしとを録ん

湯殿所へ使節 兼よコヨルといふ官人五人 これ五種頭
ありある
卯はカバダ 舟師名ハカールセステル フンゾフ 医師之 是様を

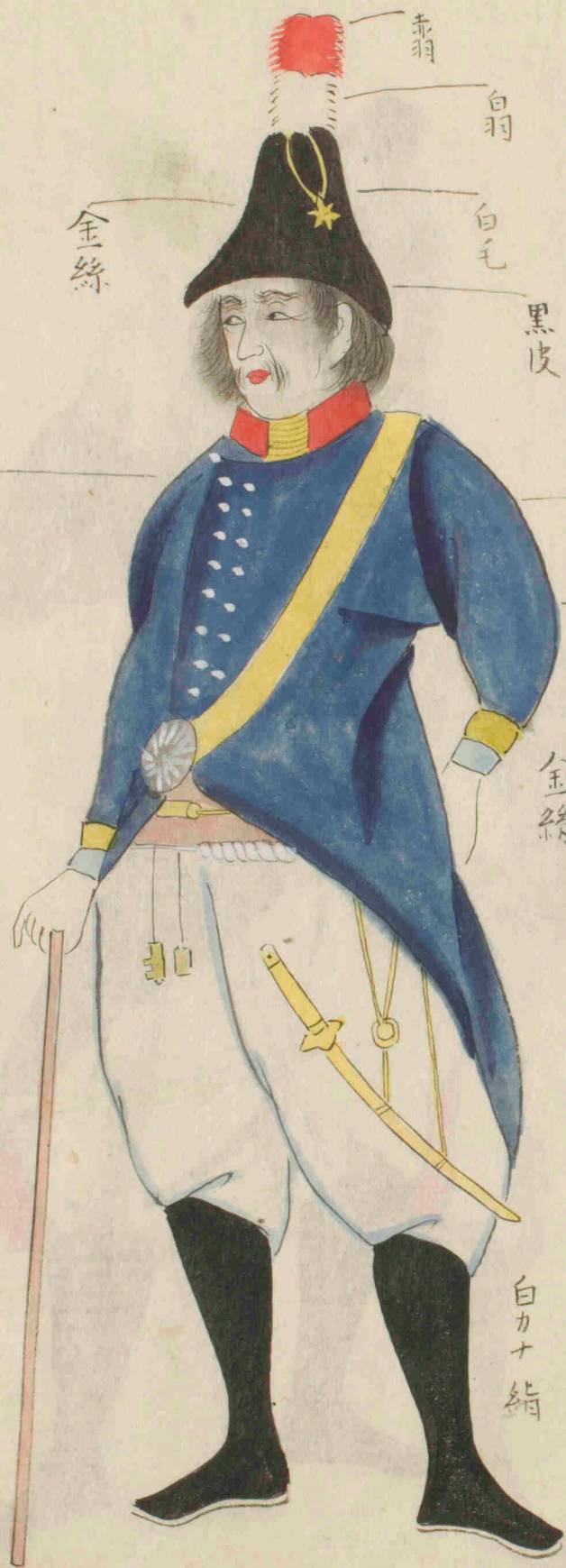
人 卯皆五を人 上連梅ヶ崎より 波戸場へより
西屋敷並立山湯殿所 以下きく由

其節通り町へいたる幕を張造りて
 都合三度程ありと云ふ

使節レサノワト等々像

英冠帽諸図

ニコラレサノワト 歳四十一



衣服花色天鵝絨但衣服は着替度毎
 地性色共種々ナレ製作ハ日ナリ

裏猩々

白カナ絹

金糸

金糸織

黒皮

白羽

白毛

赤羽

金糸

金糸玉飾アリ

スワイウスト云

比鍵ハ流金ナリ

地金銀金飾ナリ

裏ハ浅黄ノキナリ

上案針役 歳三十四

ラートマノフ



歩サ
タ
ア
シ
カ
ル



同次面

早合朋乱
三藥入



皇朝の衣被之儀、明堂、宗廟、宮中、馬肉、太鼓、兵、有別也。又、
少時、休の皇朝、或人、其後、臣の終屋の周、強固に其後、所と一人、
其地、更、其後、をうり、二、三、つ、は、代、る、なり。

冠帽

使節



役人

黑毛



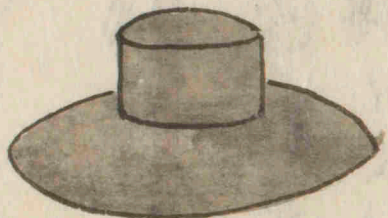
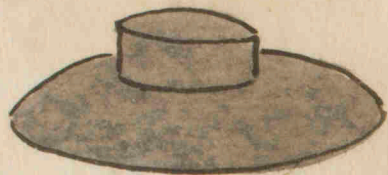
黑毛

小役人ナ
ザ冠ル



表

足輕



オ、ストロ

鎗

鏤薄

い
く
く
ま
ま
の
なり

使節我々に向ひ時々の噂より及南地まで

五九極位下寧ろこころ外の者た吐くを

うりの類を名付ケ様よく色く此九段の字ありハ

拓
うねる
あふ
なりたる
松城の
とち

賦之物不若為諸君少也免其歸帆正候

ゆるりゆるりの道中毎刻せ

活あり
り友聊あり
謝おいて

形ひし中て
 使前古強ありと承る

及家にも正徳元より正徳五の年迄 信濃の藩
使節やうゑ名へ何そと聲を成へき 忠節なる
すれど知る通へ 次事あるとも正徳へ 八有
まへ候かへ乃おハ苦しうるまへ 重の
ゆへといふ我へ 在るるは是迄年月正徳
君とあり 何ゆゑに恥ゆるや無き原を思ふ
更細致せしと 同前正徳五年正月に
中へて 越へて せめて 経典の 裁き あり

ともき一皮そて雁紗一皮に人の者へ持た
 しありた法面もやとうきよ汁ふてとく
 承くハ法面法も出入固く穢退致せし
 出接便。並に水乾何も受用て後名法名
 有く黄泥より

けふ江戸は冬以後朝と
 御と暮るる
 使節何連とて時々外
 列ねを惜しやうは
 本願海より時々舟の
 往来面会のも有

陸一 新島計 帰航のこころをいせ
 海を渡るありあまる心
 地を踏むがめす地なり
 海を渡るありあまる心

お殿さまへ
のぞくか
はせ使に立會うて
改めを
たし通す

一 浦契切自書 二枚
一 夏別仙卷五道狀 二枚

一 若宮丸 錢 銭布 一 古 升 是

一 木 緣 之 入
二
一 同 裕
五

一 同樂物
是
一 同半合解
是

一
日
端
中

一
日
端
中

一
日
端
中

一
同殺
三
一
同御
三

一
同是袋
是
一
秋父業羽織
是

一
同
凡
呂
愛

是

一
同
解
裏
ヒキトキ

是

一
省
解
表

一
毛
藏
小
手
尚

一

一 浦契切自書 二枚
一 夏別仙卷古道狀 二枚

お殿さまへ
のぞくか
はせ使に立會うて
改めを
たし通す

一 若宮丸 錢 銭布 是 一 古 計 是

一 木 緣 之 入
二
一 同 裕
五

一 同樂物
是
一 同半合解
是

一
日
端
中

一
日
端
中

一
日
端
中

一
同殺
三長
一
同御
三長

一
同是袋
是
一
秋父業羽織
是

一
同
凡
呂
愛

是

一
同
解
裏
ヒキトキ

是

一
省
解
表
之
一
毛
藏
小
手
尚
之

一 梭子 一 矢立 三

一 紙入 一 伴寄宮法師 三

一 狭 三 挺

一 口人者於魯西亞國貴物木取

一 金銭 八十 一 銀紋時斗 四

一 日本仕立結縵入 四 一 同好織 四

一 同縵半 四 一 同好引 四

一 同帯 四 一 革蒲草 大 七

一 同菱本縵枕 六 一 縵紗縵半 四

一 同合羽 四 一 縵紗 三

右王國王より進ぐ貴物の中

一 金銭 六 一 銀銭 大 六

一 銅銭 八 一 衣類及入箱 四

一 縵紗及物 四 一 同縵半 三

一 同合羽 三 一 同好引 七

一 縵草帯 三 一 同風呂敷 三

一 本縵菱麻縵半 九 一 同好引 十

一 同風呂敷 八 一 麻蒲草 五

一	毛織袴	一	一回半帯	三	箱
一	同股川	二	一回合箱	二	同
一	ゆりやま英本線帽子七	一	同股川英足袋	二	同
一	革袋	二	一回帽子	二	同
一	同当	五	一回紙入	二	同
一	手費	二	一回毛皮ソーボク貂皮を七枚	二	同
一	同袋	三	一回椰子水飲	二	同
一	姉（まこ）	二	一回火抄	二	同
一	漆本線	二	一回角本線	二	同

一	櫛	七	一回夜	七	同
一	狭	二	一回挺	二	同
一	雅	二	一回湯瀧	二	同
一	同靴	三	一回硝子袋の赤一	三	同
一	硝子瓶	三	一回玉	三	同
一	燭笈	三	一回針入	三	同
一	鏡	二	一回眼鏡	二	同
一	横文字本	三	一回世襲英船	三	同
一	麻地油	五	一回王丈婦	五	同

右に彼は延暦中 稼海に金銀銅銭を以て賣買又ハ物賣より進
と云ふやう

源室の彼金銭ハカデンツケ和黨 千リヲニザ」といふ銭

なりそ中ニ就の形ありて右たは銭を指さる人

の像あり裏面ハ横文字あり

取寄く我判より
廣く目も僅く銀銭

昌右十枚ガランツケは阿葉院なり阿葉院銭ハ
あきす

らる目ありて交易あるといふを以て辨り

りて少ゆオロエヤの金銭ハカランツケよりハ大なり

銀銭に人オ六百九十六 銅銭十に五枚 金銭

に人オ八十九枚持系

銀銭ハ新古十六ありあり皆持系なり 宝

帝よりエカテナ 南今 祖母 とハ王の像を鑄造

今の父王より已來を以て文字をよりなり

ホコトといふ字也といひたり銅銭ハ年曆何

百何年といふ文字鑄造あり

右持系を以てハ進くおは役不涉五組への改

めの書なりより書換くこゝに補入を以て櫃以後

おまふは役不涉吟味に書別事あり これハ是を
ては字留

信ずるれ既^レは海^ニ有^ル茂^ニ變^ル私^ニと^ルあ^レ——あ^レれ
とも^ハ海^ニあ^レれは^ハ海^ニ——あ^レれ

出^ル河^ニ渡^ル——の^ハ節^ニ金^ニ銀^ニ銅^ニ鉄^ニハ^ハ悉^ク——海^ニ渡^ル不^レ可^ニ

石^ノと^ハ大^ニ代^リ出^ル刻^ニ合^ニを^レ以^テ根^子を^レ至^ル——

年^ノ持^ル具^ハ三^ニ五^ニ初^ニを^レ残^ル出^ルと^ハ追^テて^ハ及^テ海^ニ沙

汰^ニと^ハ信^ニ渡^ル至^ル出^ル河^ニ渡^ル——節^ニを^レ残^ル不^レ可^ニ渡^ル

持^ル系^ハ海^ニ渡^ルを^レ終^ル——帰^ル必^ズせ^リ

同^ノ月^ノ十^ニ日^ノ海^ニ門^ニ五^ニり^ニと^ハ人^ニと^ハも^ハ二^ニ鎮^ニ門^ニと^ハ人^ニ

人^ニと^ハ別^ニれ^テと^ハ告^ル——皆^ニ再^ニ會^ニす^ルへ^テと^ハ泣^キ悲^シ

——と^ハたり^ニ又^ニと^ハ三^ニ山^ニ海^ニ渡^ル不^レ可^ニ白^ニ洲^ニを^レ至^ル一^ニ通^ル海^ニ紀

——あ^レり^ニと^ハ後^ニ追^ル——^ニ海^ニあ^レる^ニ別^ニ有^ル諸^ニ條^ニ等^ニを^レ終^ル付^ル

お^ハ海^ニと^ハ海^ニ空^ニ海^ニの^ハ通^ル揚^ニを^レ入^ルお^ハ入^ル

海^ニ渡^ルと^ハて^ハお^ハる^ニ市^ニ中^ニと^ハ何^ニり^ニ出^ル海^ニ渡^ルを^レ

——海^ニ町^ニ嶺^ニ難^ニ有^ル出^ル事^ニた^ハる^ニり^ニき^ニ

同^ノ月^ノ十^ニ八^ニ日^ノ魯^ニ西^ニ亞^ニ船^ニハ^ハ帰^ル帆^ニの^ハ由^ニ我^ニく^ハ地^ニ既^ニは

諸^ニ人^ニと^ハ裁^ニ少^ニ私^ニ會^ニ何^ニり^ニ——中^ニの^ハ暗^ニ傳^ニ受^ニ——と^ハる^ニ

友^ニけ^ニと^ハ海^ニ玉^ニ評^ニ——の^ハ出^ル方^ニを^レいつ^ル——と^ハま^ニち^ニ

善——実——意——
の——海——朝——せ——る——れ——
年——の——手——月——を——ま——き——
此——た——り——と——は——い——
三

